



若い力を大切に

日本熱測定学会 学会誌 編集委員長
大阪府立大学 農学部 高橋克忠

厳しい社会情勢のもとで、1999年が明けました。会員の皆様には様々な願いや抱負、期待を込めて今年こそはという思いで新年を迎えられたことと存じます。年頭にあたり、皆様の御健康とますますの御活躍、発展をお祈り申し上げます。

まずい管理運営体制の中で雑用に追われる日常をこぼすのは筆者だけでない。大学に身を置くほとんどの人がそう思いながらもなかなか制度の変革ができないのは、人間が本来保守的な存在であるためであろう。これはヒトが生殖期間を過ぎててもなお50～60年の長きにわたり個体としての生命を持続する例外的な生物であるということと無関係ではあるまい。生物的に身を守る(保身)行為が、社会活動にも影響がないはずはないからである。その社会的影響の悪い方を老害というが、これが支配的な集団では進歩の速度が遅くなるのは当然である。

本学会の使命は熱力学という学問体系を基盤に、熱測定・熱分析を共通の手段とする研究を通して会員相互で情報交換を計りながら研鑽を積み、さらに得られた最新の熱力学情報と培われた新しい技術、方法論を学界あるいは広く社会に伝えることにある。毎年好評をもって迎えられる初心者を対象にした熱測定講習会は本年度で40回を迎えようとしているし、内外のトピックスを取り上げるワークショップも回を重ね、30回を越えようとしている。国際会議や外国学協会とのジョイント・ミーティングも頻繁に開催され、同規模の学会としては他に例を見ないほどその活動を通じて社会貢献をしてきたことを私達は誇りに思うべきであろう。

さて、1965年の第1回討論会に始まり、熱測定研究会の時代を経て、さらに1974年の学会誌創刊から今日に至るまで、その基礎を築かれた諸先輩はもとより、会員ならびに事務局の方々の力でこうした活動は受け継がれてきた。その間、学界の趨勢や好不況の変化、時の移ろいがあっても本学会のあり方で終始変わらないのは若い人を大切にする精神であったと実感している。これは単に委員の選出が各年齢層をカバーするようになされていることを意味するの

ではない。本学会はいわゆる学会ボスと呼ばれるような存在とは無縁であり、実際、講習会やその他の特筆すべき活動は若い会員の情熱と実行力によって実施されてきたと言っている。

アメリカを始め諸外国でカロリーメトリー関連分野から若い人達の足が遠のいているという現実がある。急速に展開する現代の科学・技術の中で、熱測定・熱分析が魅力に欠ける方法論であることをその理由にあげる人は多い。しかし、本学会は幸いにもそういう状態ではない。熱測定・熱分析だからこそ得られる情報があるということを知っている若い人達が承知しているからであろう。本学会は諸先輩によって築かれた若い人を大切にする気風が今も受け継がれている。実際、討論会や国際ワークショップにおいて、基礎・応用を問わず、有能で素晴らしいセンスを持った若い方々がこの学会を支えていることをしばしば実感する。学会活動の根幹をなす学会誌の編集方針も若い委員を中心とする真剣な討議の中から生まれていることを酒井委員による本号の編集後記から汲み取って頂けるであろう。

ずっと以前のことであるが、日本人を偉大なる模倣者(great imitator)と皮肉を込めて評した人がいる。子供が親から学ぶのは模倣によってであり、それが全ての始まりである。そのことを考えると、模倣は何ら恥ずべき性質のものではないが、それを超える創造性、独創性を育むことこそ重要であることは教育審議会の答申を待たずとも従来から言われてきたところである。しかし、これは小・中学校における教育現場だけの問題ではない。現実の社会にあっても、世代による考え方の違いを理由に若い人を締め出すことによって、独創的な仕事の芽を摘んでしまうことはありうる。

年齢や地位に関係なく、ざっくばらんに議論を交わすことができる当たり前の風景をこれからも受け継ぎ、次の世代を担う人達の価値観、するどい感受性と批判精神、さらにはこれからの学会活動に不可欠な国際感覚、これらを今後とも大切にして行こうではないか。それこそが、本学会に期待される活動の原動力であると考えた次第である。